

## 奈良県吉野山の土地利用の変遷と旅行雑誌から見た景観受容の変化

Transition of Land-use and Changes of Landscape Perception in Tourist Magazine in Yoshinoyama, Nara Prefecture

東口 涼\* 今西 純一\*\* 飯田 義彦\*\*\* 森本 幸裕\*\*\*\*

Ryo HIGASHIGUCHI Junichi IMANISHI Yoshihiko IIDA Yukihiro MORIMOTO

**Abstract:** It is said that cherry tree planting in Yoshino has the history of 1300 years, and tens of thousands of cherries can be found today. However, there is no detailed record about planted location, numbers, etc. This research is the first quantitative analysis of landscape change in Yoshino. We defined a study area of 516 ha and picked up 3 periods (the Meiji era, 1970s, and the present), then sorted land use of each era with ArcGIS (Esri). The information sources we used were cadastral maps (made in 1881-1887) for the Meiji era, and aerial photographs for 1970s and the present. We also surveyed the contents of the oldest Japanese tourism magazine, *Tabi*, to clarify the trend of tourism both at local and national level, and the people's perception of landscape in Yoshino. Yoshino region has changed from an agricultural commune to a tourist resort, and experienced the expansive afforestation between these two ages. This study clearly showed the transition of land use and resulting landscape under the influence of these social/communal conditions. In addition, changes in people's perception of landscape of cherry trees were also pointed out.

**Keywords:** Yoshinoyama, Japanese Mountain Cherry, landuse, cultural landscape, tourism, tourist magazine

**キーワード:** 吉野山, ヤマザクラ, 土地利用, 文化的景観, 観光, 旅行雑誌

### 1. 研究の背景と目的

奈良県吉野山では修験道の神木としての献木行為を背景に多くのヤマザクラが植栽され、古くから日本屈指の桜の名所として知られてきた<sup>1)</sup>。現在は斜面一面を桜が覆う景観が形成維持されているが、歴史的に見れば、桜樹林とその景観は常に一定の量(面積)および質で恒常的に維持されてきたわけではなく、桜を取り巻く自然/社会環境要因によって、時代ごとに絶えず変化を伴いながら維持されてきていると考えられている<sup>1)・2)</sup>。特に20世紀に入ると度々調査が行われ、桜景観の質の面での衰退が指摘されてきた<sup>1)・2)</sup>。また吉野山サクラ調査チームによる最新の調査(2008-2010)においても、複数の要因に起因する桜景観の危機が明らかになった。

現況の改善策のひとつとして長期的な景観計画の作成の必要性が指摘されており、その際には吉野山の景観の歴史的背景が重要な情報となる<sup>3)</sup>。しかしながら、農業的土地利用に関する既往研究<sup>4)</sup>や献木の大きな記録<sup>1)</sup>など断片的な記録があるのみで、桜樹林の植栽範囲・面積、桜樹林以外を含む広域的な土地利用や景観などに関して定量的な把握はなされていないのが現状である。よって本研究では測量に基づくデータが得られる明治以降に着目し、吉野山での広域的な土地利用および景観の変遷を定量的に把握することを目的とした。また、旅行雑誌の掲載内容の通時的分析を合わせて行うことで、吉野山における景観変遷と、観光動向および人々の景観受容の変化との関係性を明らかにした。

### 2. 調査方法

#### (1) 土地利用の変遷

##### (i) 調査対象地の概要

吉野山地域(奈良県吉野郡吉野町)のうち、吉野神宮から奥千本附近までの516ヘクタールを対象地とし(図-1)、ArcGIS10(Esri)を用いて、年代ごとの土地利用図の作成を

行った。この範囲内には、下千本・中千本・上千本・奥千本と呼ばれる大規模な桜植栽地が存在しており、また吉野山の集落や社寺・史跡等の大部分が含まれる。

##### (ii) 情報源

本研究では、測量に基づく最古の情報源として、奈良地方務局五條支所蔵の公図を利用した。図中の作製者欄に「大阪府大和国吉野郡吉野山」とあることから、吉野山が大阪府に編入されていた1881-1887(明治14-20)年の作製と考えられる。公図中の凡例は、田・畑・郡村宅地・山林・原野・池溝川・道路・官有社寺・官有山林・御陵・墳墓地・荒地・墓地・官有原野であり、桜樹林の区別はなされていなかった。それ以降の時代については空中写真が存在するが、古い時期に撮影された写真は解像度が低く、詳細な土地

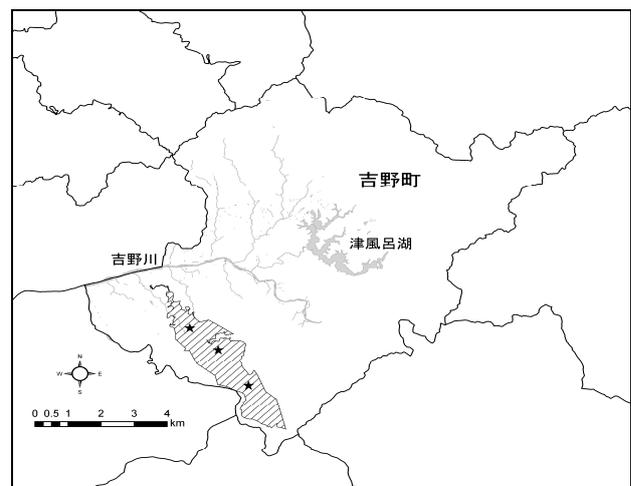


図-1 調査地の位置

\*京都大学大学院農学研究科 \*\*京都大学大学院地球環境学堂 \*\*\*京都大学大学院地球環境学舎 \*\*\*\*京都学園大学バイオ環境学部

利用の判別が困難であった。そこで判読可能な1974年国土地理院撮影のものを判読した。また、現況については吉野町が撮影した2011年4月17日の空中写真を利用した。

これらをもとに、桜樹林、その他樹林(カエデ等の広葉樹林、針葉樹林、雑木林、竹林など)、田畑、建築物、その他(道路、空き地、駐車場、墓地、池、荒地など)の5つの地目に分類した。ただし前述の通り、明治期に関しては桜樹林の区別がなかったため、樹林としてひとまとめにして扱った。

## (2) 景観変化の分析

作成した土地利用図を用いて過去の景観の推定を行った。吉野山には複数箇所、山の景色を見渡すことのできる場所が存在するが、これらのうち明治期から現在まで共通して存在したと考えられる3カ所の展望所を選定した。下千本の昭憲皇太后御野立跡、中千本の吉水神社、上千本の花矢倉展望台である(図-1内の星印、北から順に)。それぞれの位置をArcGIS上にプロットしたうえでDEMデータ(国土地理院基盤地図情報数値標高モデル、10mメッシュ)を利用して、各視点場からの可視範囲を抽出した。その後、可視範囲に含まれる景観要素の割合を、3カ所それぞれについて各年代ごとに算出し、土地利用変化に伴う景観の変遷を明らかにした。

## (3) 旅行雑誌から見た景観受容の変化

### (i) 雑誌『旅』について

旅行雑誌『旅』を用いて、観光の側面からも景観変化の分析を行った。『旅』は1924年4月日本旅行文化協会によって創刊された、日本で初めての本格旅行雑誌であり、戦時中を除き、1924年から現代まで、月刊で通時的なデータが得られる点で貴重かつ有用な資料源である。また、ひとつの観光地だけを別個に特集するガイドブック形式ではなく、種々の特集を通して日本各地の旅先や土地の魅力を伝えるという内容であることから、全国の観光地の中における、ある特定の地域の位置づけを知るという目的に利用できると考えられる。今回、調査対象としたのは、1924(大正13)年創刊号から2004(平成16)年1月号(JTB発行分の最終号)までの計927冊であった。

### (ii) 掲載記事量の集計と分析

年ごとに吉野山に関する記事に割かれたページ数を記録し、その推移を見た。ページ内に「吉野山」「下千本」「蔵王堂」など吉

野山に関連するキーワードが含まれていれば、たとえ短い記述であってもこれを1ページとしてカウントし、掲載記事量を整数値で集計した。これを近鉄吉野駅の定期外乗客数の推移<sup>5)</sup>と比較し、雑誌『旅』が吉野山という地域の注目度、観光動向を知るための情報源として利用出来る事ことを示した上で、1920年代以降の観光動向をみた。なお定期外乗客数の推移は、観光客数の推移を反映していると考えられ、同時に観光客数に関する資料の中で、もっとも長期間、安定的にデータが得られるものであった。また、掲載された月を取得資料から集計し、掲載の季節性を明らかにした。

### (iii) 掲載写真の集計と分析

景観(建築物含む)の写真のみについて、その掲載量の集計と被写体の分析を行った。被写体については、時代ごとに注目されてきた景観要素の変化をみるために、選別済みの風景写真を、群桜/桜が写り込んでいるもの/桜以外の被写体別に分類した。なお、ここでは群桜は「斜面を桜が覆っている景観」「集中的に桜が植栽されている景観」のように、一枚の写真中に複数の桜樹が写っているものを指す。桜が写り込んでいるものとは、例えば勝手神社内の桜のように「一本の名木」が写っているもの、および建築物などの写真に前景として「桜樹の一部の写り込ませている」ものを含む。桜以外とは、主に「建物などの写真」のことである。この分類を行った後、時代ごとにその枚数を集計し、傾向を分析した。

また、全体を概観したところ、時代が下るに従って、より広角な範囲を写す傾向があるように思われた。そこで、被写範囲の変化の分析により、これを定量的に明らかにすることを試みた。写真からそこに写り込んだ土地の面積を数値として直接割り出す事は困難であるため、対象地全体にArcGISを用いて200m×200mのグリッドを設定し、そのマス目のうち何マス分が写り込んでいるのかをカウントするという手法を用いた。なお、マス目のうち一部でも写り込んでいる場合には、これを1としてカウントし、整数値で表した。

## 3. 結果

### (1) 土地利用の変遷

3時代の土地利用図を図-2に、時代別の地目割合を図-3に示した。図-2をみると少なくとも対象とした3時代の間は、尾根筋にあたる土地に社寺や家屋などの建築物が集中しており、それ以

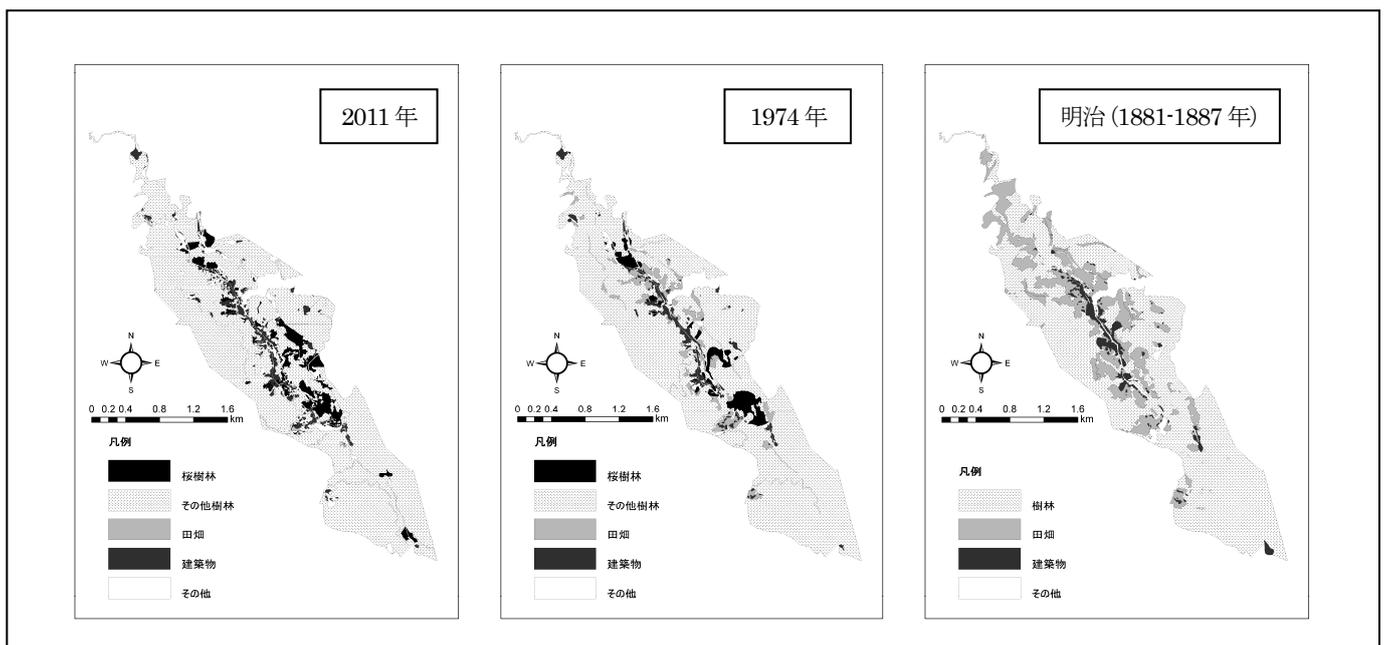


図-2 吉野山の年代別土地利用図

明治期は資料の制約上、桜樹林の区別がない。

表-1 田畑の転用状況

単位は(ha)

	田畑	桜樹林	その他樹林	建築物	その他
明治 (1881-1887)	103.34	-	-	-	-
1974年	19.83	4.50	67.55	6.05	5.51
2011年	1.07	6.39	70.97	7.41	17.56

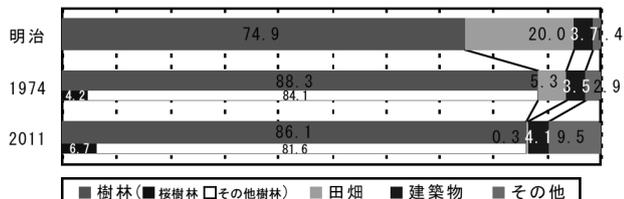


図-3 吉野山の地目別面積割合の変化

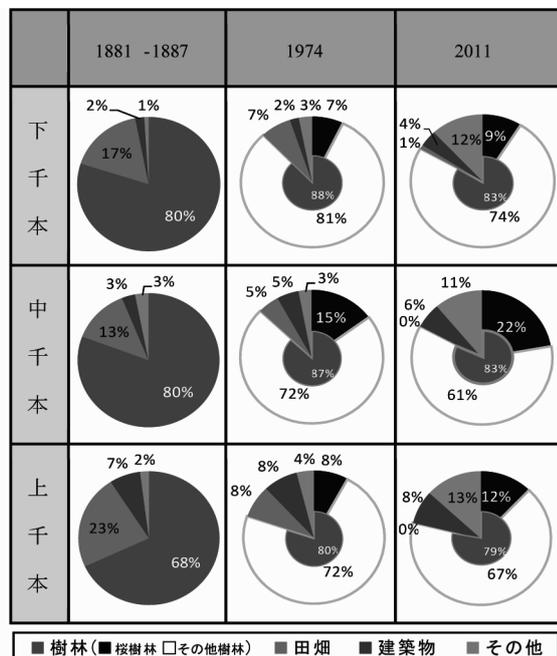


図-4 展望所ごとの景観変化

明治期は桜樹林の区別がない。

外は主に樹林地であったことが分かる。明治期については現在と比較すると田畑の多さが目立ち、主に建築物周辺の斜面地に存在していたことが見てとれる。各地目別面積は、樹林(桜樹林とその他樹林地を合わせたもの)が 386.16ha、田畑が 103.34ha、建築物が 19.17ha、その他が 7.11ha であった。1970 年代になると、田畑が大きく減少した。桜樹林は、現在の下千本・中千本・上千本の場所に比較的明確に分かれ存在するが、奥千本・金峰神社周辺には見られなかった。地目別面積は、桜樹林が 21.87ha、その他樹林が 433.62ha、田畑が 27.38ha、建築物が 18.27ha、その他が 14.80ha であった。2011 年になると桜樹林は、更に拡大した。下千本・中千本・上千本・奥千本と呼ばれているエリアに多くが分布しているが、建築物の周辺にも認められる。また植栽地の拡大により、中千本と上千本の桜樹林がひと続きに繋がっているといえる。一方で田畑はほぼ消失した。地目別面積を見ると、桜樹林は 34.44ha、その他樹林が 410.30ha、田畑が 1.56ha、建築物が 20.94ha、その他が 49.05ha であった。

図-3 から明治以降の樹林の増加、田畑の減少が特に顕著で

あることがみてとれる。土地利用図によると、明治期の田畑は 1974 年の時点で約 80%が、2011 年では約 99%が他の用途に転用されていたことが分かった(表-1)。なおこれら転用された田畑のうち約 70%が、1974 年の時点で「その他樹林」となっていた。

(2) 土地利用変化に伴う景観の変化

ここまで対象地の土地利用の変化を面積に注目し分析してきた。次に、これらが実際の景観の面で、どのような変化をもたらしたかをみていく。各展望所からの可視範囲は下千本約 70.5ha、中千本約 77.7ha、上千本約 140.5ha であった。現実には建物や樹木で見えない範囲も含まれたが、標高データから判定するとこのような数値となった。まずは各時代に見ることができた景観要素の割合を、展望所ごとにまとめた(図-4)。これを見ると、各時代を通して山林(桜樹林含む)が主たる景観要素であったことが分かる。また 3. (1) で指摘された田畑の減少が、景観の面でも影響していることが明らかとなった。次に桜景観についてみていく。各展望所からの可視範囲にある桜樹林の面積は、1974 年において下千本: 5.01ha、中千本: 11.97ha、上千本: 10.80ha であり、2011 年において、下千本: 6.47ha、中千本: 17.40ha、上千本: 17.37ha であった。比率としては、下千本が約 1.3 倍、中千本約 1.5 倍、上千本約 1.6 倍に増えており、結果、可視範囲内を占める桜樹林の割合はすべての地点において増加していた。桜樹林の拡大が確実に景観に影響していることが明らかになった。

(3) 観光雑誌から見た人々の景観受容の変化

(i) 取得した記事

雑誌『旅』計 927 冊を調査した結果、38 冊から吉野山に関する記事が見つかった。写真のみで構成されるページも含めると、全掲載量は 113 ページであり、そのうち桜に言及していたのは 85 ページであった。風景写真は 59 枚掲載されていた。

(ii) 掲載記事量の集計結果

掲載記事量の推移を表したのが図-5 である。これを見ると、掲載量は一定ではなく、多い時代と低調な時代があったことが分かる。これは、すなわち吉野山の観光地としての注目度を反映しているものと考えられる。1950 年代からの長期的なデータが残されている近鉄吉野駅の定期外乗客数の推移(図-5 中のグレーのプロット)から、吉野山への観光客数の推移を追ってみると、第二次大戦後、1950 年代から 1960 年代前半まではやや低調で、1960 年代後半から急激に観光客が増加している。そして、1970 年代から 1980 年代にかけてピークを迎え、1980 年代後半から再びやや減少傾向に入るといえる。掲載数の推移は、この傾向とおおよそ対応しており、雑誌『旅』の掲載内容から、過去の吉野山という地域の注目度、観光動向を知ることが可能であると判断した。

次に掲載の季節性を見た。図-6 に示した通り、桜の時期である 4 月が圧倒的に多く、全 113 ページ中 54 ページ分が、4 月の掲載記事という結果だった。7 月が 17 ページ、5 月が 11 ページ、6 月が 8 ページと続き、初夏の新緑の季節にも一定の掲載量が見られるが、やはり桜景観が吉野の主要な観光資源であるといえよう。

(iii) 掲載写真の集計結果

まず、写真の掲載数は近年のみに偏っていることはなく、全年代にわたって掲載記事量の推移に対応した推移を見せていた。よって、写真の内容の通時的変化を分析することに問題はないと考えられる。被写体の年代ごとの変化をまとめたのが図-7 である。掲載期間を 1920 年代から 2000 年代までの 10 年ごとに区切って、そこに含まれる写真の被写体別の枚数を集計している。これを見ると、どの年代においても必ず桜は写されており、戦時中で一時休刊もあった 1940 年代以外は、複数の桜が集まって植えられた「群桜」の写真が撮影されてきたことがわかった。一方で、桜以外の建築物等の写真は写真総掲載数が多い年代に見られる傾向があり、掲載枚数が 5 枚に満たない期間では、1940 年代を除き、これらの

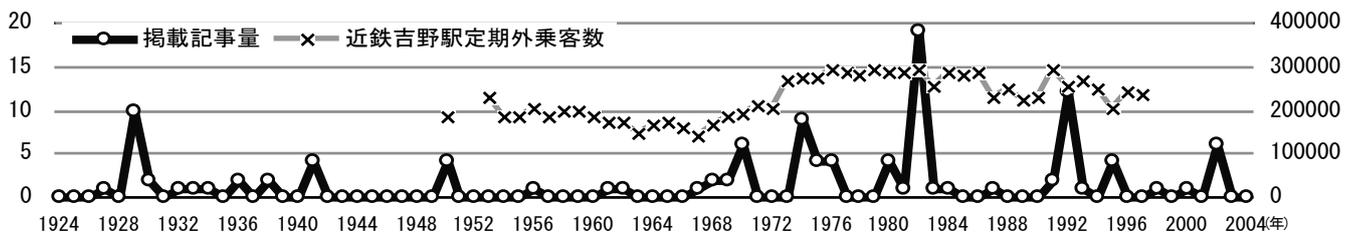


図-5 雑誌『旅』における掲載量と観光客数の関係

左の縦軸が掲載記事量(単位はページ)、右の縦軸が乗客数(人)を表す。

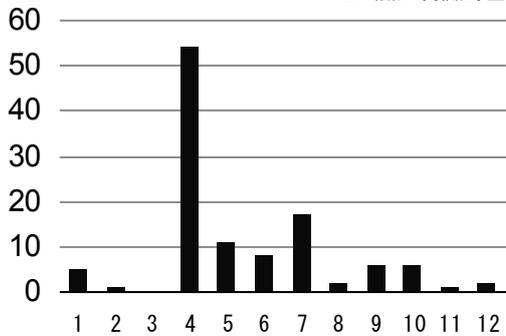
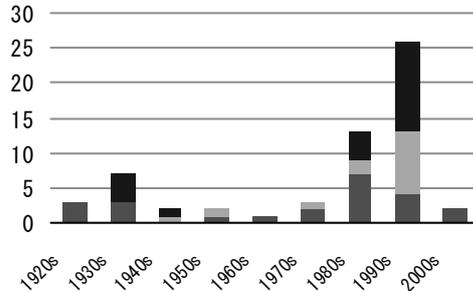


図-6 雑誌『旅』の月別掲載量

縦軸はページ数 横軸は月を表す。



■群桜 ■桜が写り込んだ写真 ■桜以外

図-7 年代ごとの被写体内訳

縦軸は掲載写真数(単位は枚)を表す。

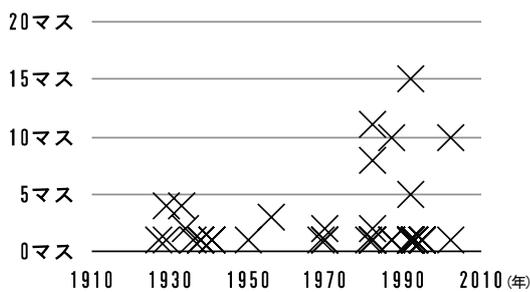


図-8 被写範囲の推移

写真は見られなかった。桜が第一の注目要素であり、続いて南北朝時代の史跡や社寺などが着目されていたのだろう。掲載の季節性および写真の内容から、少なくとも1920年代以降、桜が主要な観光資源であったことが改めて裏付けられたといえる。

被写範囲の集計の結果は図-8のようになった。1970年代までは設定したグリッドの5マス分(0.2km<sup>2</sup>相当)以下の範囲を写したもののばかりであったが、1980年代以降、より広範囲が撮影された写真が見られるようになったことが分かる。これは吉野山の景観が、かつては「金峰山寺蔵王堂」「下の千本」などと比較的ピンポイントで局所的な要素で捉えられていたのに対し、近年ではより広範囲を見渡す、言わば「展望型」の景観として捉えられるようになってきたことを意味していると考えられる。

#### 4. 考察とまとめ

雑誌『旅』の内容分析から、少なくとも1920年代以降は吉野山が「桜」の名所として認識されてきたことが改めて示された。

一方で、土地利用と景観の変遷を見ると、明治の頃は田畑の割合が比較的高く、現在のように斜面一面見渡す限りの桜という景観ではなかった可能性が示唆された。つまり明治の頃は田畑が広がる山に桜の密植地が存在するという景観だったと考えられる。表-1ならびに図-2で示したように、その田畑は主に「その他樹林」に変わったが、これは造林により人工林に転用されていった影響と考えられる。本研究により、小田が指摘していた<sup>4)</sup>田畑の山林化についても、吉野山全域レベルで定量的な評価ができたといえる。時代を経るごとに田畑の山林化と桜樹林の拡大が並行して

進み、上述のような景観から、現在のような斜面一面の桜樹林と人工林の景観へと変遷してきたのである。

生業面から捉え直すと、明治以前は桜の名所でありながら自給的農業集落でもあったが、農業は時代とともに縮小し、全国的な観光ブームの中で、吉野山でも1970年代頃から観光業がより盛んになってきた。この流れをうけて「観光資源」としての桜が重要視されるにしたがい、吉野山の人々は従来より大面積の桜を指向するようになってきた可能性がある。そして大面積化が進行する中で、これを見る人々の桜景観の捉え方も変化し、より広範囲のものとして捉えるようになってきた(図-8)。吉野山の桜景観を表す言葉に「一目千本」という表現があるが、かつては“一カ所に集中して植栽された群桜”を指していたのに対し、現在では“見渡す限りの桜”という景観を示すものに変化してきたと推測できる。

特に近年になって桜樹林は拡大傾向にあるが、明治以降の歴史を見ると、現在は極めて大面積化している特異な状況であることが明らかになった。吉野山サクラ調査報告書<sup>3)</sup>でも述べられているように、桜の生育不良が指摘される中で、桜樹林の大面積化と桜樹の管理に割ける労力のトレードオフの関係や、集落の高齢化に伴う人材の不足などを考慮すると、現在の大面積化を続けることは困難である。長期的な景観計画を作成するにあたっては、現在の方向性を見直し、今後は縮小あるいは少なくとも現状維持に留める方針も、過去の歴史を振り返れば適切な選択肢のひとつであることが本研究から示唆された。

#### 補注及び引用文献

- 1) 桐井雅行(1993): 吉野山の桜: 吉野町歴史文化叢書第3集 吉野山桜物語: 奈良県吉野町経済観光課
- 2) 吉野山「サクラ」対策検討委員会(1995): 吉野山桜活性化調査報告書: 奈良県農林部治山課
- 3) 吉野山サクラ調査チーム(2011): 平成20~22年度吉野山サクラ調査報告書: 吉野山サクラ調査チーム
- 4) 小田匡保(1992): 吉野山における農業的土地利用とその変化: 駒澤地理 28, 45-74
- 5) 小田匡保(2000): 吉野山における観光客数の推移と季節性: 駒澤地理 36, 33-54